

# 生徒にとって、本当に必要な文法力を身につけさせるために

## —『Grammar Gym』発行にあたって—

竹岡 広信

### 1. 『Grammar Gym』の執筆動機

#### (1) 「便覧」から「演習」へ

「大切なものは繰り返し演習させる」、これが語学の基本だと思います。『Grammar Gym』は、そのような思いを抱いて執筆に至りました。

昨今の生徒たちが持っている文法問題集を見て感じることは、「便覧的なもの」が多いということです。だいたい、どの問題集も問題数は1000前後なのですが、大切なものも些末なものも時代錯誤なものも、ほぼ1題ずつ掲載されています。たとえば仮定法の項には、「仮定法過去形」の問題が1題、It is time SVの問題が1題、But for～の問題が1題という具合です。これでは、生徒たちに基礎となる文法が定着するとは思えません。イギリスのケンブリッジ大学出版局の文法問題集(たとえばGrammar in Use)などでは、「仮定法過去形」の問題だけで数十題あります。『Grammar Gym』もこのような「使える文法書」に倣い、「薄く広く」ではなくて「大切なことを手厚く」を柱にしました。

試験的に塾や予備校で『Grammar Gym』を使ってみました。思いの外、効果があり、この方針で間違っていないことを確信しております。

#### (2) 何のための文法か

「先生！文法苦手なのですが、何をやればよいのですか？」という学生の声をよく聞きます。「文法って、何に使うの？」と質問すると、「問題を解くためです。」という返事。本来、文法とは「読む(聴く)ために必要な文法」と「書く(話す)ために必要な文法」しかないはずですが、「使用頻度を無視した文法問題のための文法問題」や「日本でしか通用しないような書き換え」は不要です。not less than や〈Hardly had S + 過去分詞形 when / before SV〉などの、実際の英語では非常に頻度の低い「文法問題のための文法事項」が、なぜ今でも日本の英語教育の世界

では大手を振って闊歩しているのでしょうか。

私は常々、日本の英語教育、特に文法はその体系そのものを見直す時期に来ていると考えています。

「英語を運用する上で大切なものを徹底的に訓練する」というのが、あるべき姿だと思います。そのような思いを形にしたものが、この『Grammar Gym』です。洛南高等学校 田平稔先生をはじめとする多くの方々のご協力の元、自信を持って世に送れるものができたと自負しています。

### 2. 『Grammar Gym』の発想

#### (1) 大切なものを反復させること

「英語は反復訓練が一番」とは、英語学習の王道です。何度も何度も繰り返すことで、初めて定着するものだと思います。この基本に立ち返るために『Grammar Gym』は編まれています。高校の授業では時間数の関係で、なかなか反復訓練が困難です。そこで短い時間で最大の効果を上げるような教材を作りたい、という思いが『Grammar Gym』の根底にあります。たとえば、仮定法では、「～がなければ」とか「if の省略による倒置形」なども扱いますが、それよりも、「直説法か仮定法かの識別」だけで1枚のテストを作っています。

#### (2) 網羅性より頻度を重視

〈Hardly had S + 過去分詞形 when / before SV〉という類の、実際の英語で見られる機会の少ないものを網羅的に演習するのではなく、使用頻度が高く初学者にとって重要と思われるものを精選しました。

従来の文法問題集では1, 2問しかなかった「比較の基本の反復訓練」や「what と that の識別問題」などの生徒がつまずきやすいポイントの演習を数多く掲載しました。

### (3) 読解, 英作文の視点を採用

たとえば、「〈前置詞+名詞〉をカタマリとして捉えさせる」ことは読解の基本となる事項です。こうした読解の基本となる文法訓練は、従来の文法問題集では訓練ができませんでした。『Grammar Gym』では、そうしたもののだけで独立した問題演習形式として取り上げ、生徒たちの読解の基礎となる文法力の定着にも力を入れました。さらに、英作文では生徒たちがよくつまずく「could を過去形として使える場合はどんな場合か」なども、独立した問題演習にして確実な力となるように工夫しました。このように、単に文法のための文法問題集ではなく、読解と英作文の視点に立った文法問題集になることを目指しました。それぞれの分野での大切なポイントを幅広く演習できるように工夫しています。

## 3. 『Grammar Gym』の例文へのこだわり

### (1) 例文はできるだけ自然な英語にすること。

できるだけ1文ないしは2文で、具体的なイメージを思い浮かべることができるものになるように心がけました。たとえ文法訓練のためだけとはいえ「英語は言語」であることを考え例文を作りました。なおイギリス人の David James 先生、アメリカ人の Barry E. Keith 先生にはすべての例文をチェックしていただき、より自然な英語になるように貴重な助言を頂きました。

### (2) 所々に「小粋な」表現を含んでいること。

「宿題を終える」とか「列車に遅れる」などの陳腐なものだけでなく、「着信音をメールで送る」などの「小粋な」表現をちりばめました。ただ、そのような表現が多すぎると、「重たいもの」になってしまうおそれがあるので、スパイス程度にとどめました。

### (3) 人名は、現在よく使われているものにすること。

Bob, Tom, Nancy の類だけではなく、1990年代生まれの生徒と同世代の英米人の名前に多いものを使用するようにしました。

リスニングでも人名は意外と苦勞するもの。早い段階から正しい発音とともに学ばせたいと考えました。当然ながら、文頭に he や she などの代名詞が来るのは避けました。

### (4) 単語のレベルをできるだけ平易にすること。

初学者にとって難単語は、たとえ語注があっても、嫌なものです。そのような配慮から、例文には初学者に必要な単語を精選し、無理なく学習できるようにしました。少し難しいと思われる単語には語注(★印で提示)をつけましたが、その語注のついた単語でさえも、初学者にとって不必要な単語はないと考えています。

以上のような厳しい制限の元で作成した英文が『Grammar Gym』の柱となっています。

## 4. 『Grammar Gym』の問題形式へのこだわり

### (1) 1つのポイントを繰り返し出題

『Grammar Gym』の基本的理念に基づき、各テストでは同じポイントを例文を変え、何度も何度も出題しました。原則的に、1つのポイントにつき10題としました。様々な例文により反復訓練することで、生徒たちの理解が深まることと思います。

### (2) 四者択一ではなく、二者択一形式を採用

問題形式は、原則的に四者択一ではなく、二者択一形式を採用しました。たとえば分詞構文では seeing か seen を選ぶ問題にしました。このタイプの分詞構文の問題では、「主文の主語と分詞構文の主語との関係が、能動か受動か」だけを確認すればよいわけです。よって、従来ありがちな to see や, being seen などの本質からずれる選択肢は排除しました。これと同じことが, surprising か surprised かの選択問題, make him go か make him to go かの選択問題などにも当てはまります。「生徒を陥れるための設問」ではなく、「生徒の力を定着させるための設問」にこだわった結果です。意味不明な選択肢やダミーの選択肢を排除することで、一層効果的に文法の定着が図れると確信しています。『Grammar Gym』が入試問題を採用するのではなく、すべてオリジナルの問題で作ったために可能になった形式だと自負しています。

### (3) 裏面に空所補充形式を採用

「反復が大切」という信念の元、テスト問題の裏面には、原則的に表面と同じ問題を空所補充の形でテスト問題 (Check Your Understanding) にしまし

た。これは授業中にやる時間がなくても、自宅などで復習する際には効果があると思います。生徒たちは文法、語彙問題でも選択肢があれば解けるが、空所に適語を補充させる問題にすると、とたんに正解率が下がる、という経験に基づきこの形式を採用しました。

#### (4) すべて10点満点

60種類あるすべてのテストを10点満点にすることで、定着率を他と比較することが容易になると思います。採点もすぐに終わり、短時間で容易にテストができるものと考えています。

### 5. 『Grammar Gym』の解説へのこだわり

#### (1) シンプルに見やすく

ポイントがはっきりとわかるようにシンプルで見やすい形式にしました。「大切なことは、重要なポイントを明確に記述する」というコンセプトに基づいて、無駄な情報が極力入ってこないように工夫しました。

#### (2) 「考え方」を提示

すべてにわたって詳細な「考え方」をつけ、どのように考えれば正解に至るのかを説明しました。それ故、ホームルームや放課後の空き時間でもテストを実施することが可能です。もちろん、休暇中の課題として使っていただくことも可能です。

#### (3) 追加情報を控えめに提示

問題演習で扱いきれなかったけれど、生徒たちには是非知っておいて欲しいと思う情報は、「学習のポイント」に、出しゃばらない程度に控えめに提示しました。あくまでも「追加情報」の扱いとしています。

### 6. 『Grammar Gym』に収録されている文法事項へのこだわり

#### Vol. 1

扱う文法事項は、①〈前置詞＋名詞〉、②動詞、③時制、④助動詞です。すべて「基本中の基本」として押さえておきたい文の骨格をなす文法事項です。「動

詞」では「自動詞と他動詞の識別」、「動作動詞と状態動詞の識別」などを扱い、「時制」では「現在と未来の識別」、「過去と現在完了の識別」といった大切な事項を扱います。

#### Vol. 2

①態、②不定詞、③動名詞、④分詞、⑤比較のような文を複雑にする文法事項を中心に扱いました。受動態は中学レベルの復習からスタートします。その受動態の基本を身につけた上で、〈SVO＋to (V)〉、〈SVO＋過去分詞〉、分詞構文など「する・される」の違いを徹底的に訓練します。比較では、〈比較級＋than〉やas～asを含む文の作り方の反復訓練を行います。

#### Vol. 3

ここでは①関係代名詞、②関係副詞、③仮定法、④数量を表す形容詞・代名詞を扱います。「関係代名詞＝代名詞」の基本を徹底することで、関係代名詞の定着を図ります。「what と that の識別」、「限定用法と継続用法の識別」なども扱います。仮定法は、直説法との違いを識別させることを徹底した上で、基本となる仮定法を訓練します。数量を表す形容詞は、特に「a few と few の識別」、代名詞は「either と any の識別」などに焦点を当てて訓練します。

以上のような「こだわり」を持って、この『Grammar Gym』を作成いたしました。本書によって、文法が苦手な生徒、嫌いな生徒が、少しでも減ることを願っております。どうぞよろしく願いたします。

(駿台予備学校講師・洛南高等学校講師・竹岡塾主宰)

☆ 編集部より ☆

竹岡広信先生監修の英文解釈問題集  
『ビューポイント』シリーズも好評発売中！  
pp.22-23のご案内もあわせてご覧ください。